

雑感「無知の善意」

住職 千坂げんぼう

月遅れ盂蘭盆を過ぎると朝晩めっきり涼しくなる。墓地内の散策も暑さをあまり気にしなくても良くなる。至るところ咲き誇るヤマジノホトトギス、咲き始めたオクモミジハグマ、シラヤマギク（九月五日現在）。しかし、この会報が皆様の手に届く頃にはサワギキョウ、オヤリハグマの最盛期へと移り変わっているであろう。虫の集く声を聞くと何となく追想の気分になるのは、日本の四季のしからしむるところであろうか。

ことしの夏も面白いことが多かった。東京大学大学院の調査に水生昆虫を専門にしているT氏が新たに加わったので、久保川イーハトーブ世界の今まで知らなかった姿を教えてください。夜に懐中電灯でため池の生き物を見るといっけいのは新鮮な感動を覚えるものがある。また、夏毛の鮮やかなテンと三回遭遇したり、ノスリが雀を襲っているのを初めて見る事が出来た。これも調査に同行しているせいである。

このような調査で知り得たことは単に知識を増やしたことなのではない。博物的な知識は自分の拠り所である地域の縁をより深く知ることによって役立つ。

修行道場では「知識を捨てろ」とよく言わ

れる。この場合の「知識」は分別知、相対知と言われるもので、一般的な分析をもととした知識のことである。臨済宗の公案（問答のために師匠が課す問題）による修行は、知識偏重の行動に疑念を持たせることから始まる。他（対象と自己が一体化する「入我・我入」の世界を体験すること、周りの世界（縁）と自己との関わり合いは一層明確になる。自分を取り巻く縁と一体化しても、自己の存在は他のものに埋没するのではない。この禅的境地は自然・社会と、ゆったりと「和」していても、絶えずその変化に素早く対応できる鋭敏な感受性を要求する。所謂「活発発地」である。禅で言う一体感、無自覚で漠然と自然と一体となつていると感じる日本人的自然観「マン・イン・ネイチャー」とは全く異なっている。

日本の自然はかつては少々の収奪を行つても再生する余地があつた。このため日本人は、



テンの正面姿

山菜や山野草を取ることに罪悪感を持たない。一閑地方でも各地で山野草展などを開いているが、そこで展示されているもののほとんどは盗掘したものである。盗掘の果ては山野草の絶滅をもたらす。せつかく豊かな生態系多様性に満ちた地域に居ながら、自分たちでその豊かさを掘り崩している。

また、身近に鮮やかな色彩の在来種の山野草がありながら、農家の人はガーデニングなど大変外来種を好む傾向が強い。私などはベニバナヤマシヤクヤク、コウホネ、フシグロセンノウ、ヒツジグサ、サワギキョウ、トリカブト、ノカンゾウなど、在来種でも鮮やかな色彩があるので、それらが保全される自然、盗掘されない社会環境をつくるほうが素晴らしいと思うのだが、どうも農家の人は在来種に関心を持たないのである。

外来種、園芸種は色の濃いものが多いし入手しやすい。しかし、そういう花々に慣れることは味の濃いコンビニの弁当ばかりを食べ続け、味オンチになることに似ている。

その結果、オオハングウソウ、セイタカアワダチソウなどの外来種が持つ在来種を駆逐する危険性には全く関心を持たなくなる。かえって大事に残している人が多い。

無知による「善意」の行為ほど怖いものはない。無知に陥らないためには絶えず自然から学ぶ必要がある。「久保川イーハトーブ自然再生協議会」の活動は、その意味で有り難い存在なのである。